

令和 6 年 5 月 14 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00102

研究課題名（和文）保守的自由主義による全体主義批判の多面的研究

研究課題名（英文）Multifaceted research on the criticism of totalitarianism through conservative liberalism

研究代表者

小島 秀信（KOJIMA, Hidenobu）

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：10735294

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：研究期間全体を通して、研究代表者として単著『市場と共同性の政治経済思想』を刊行し、単著という形で本研究費の成果をきちんと社会に出せたことは大きなことであった。また、ポランニー研究会での討議を通じて、若手のポランニー研究者の研究発表の場、研鑽の場を提供できたことは研究コミュニティの拡充という点では意義深いことであった。若手研究者の査読論文の投稿などの後押しともなったので、若手育成という重要な機能も果たせたと思う。ただ、コロナ禍という特殊事情があり、マイケル・ポランニーの未公開資料が収蔵されているシカゴ大学での調査が行えなかったことが心残りとしてある。その点も今後の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究期間における最大の研究成果としては、単著『市場と共同性の政治経済思想』およびマイケル・ポランニー著『ミーニング』の翻訳を刊行したことであろう。ポランニーの『ミーニング』は全体主義批判を一つのテーマとしており、その難解な議論の内容を日本語で社会に問うことができたのは大きな意義があると思われる。要素還元主義批判という科学哲学的議論が、大きく生命、宗教、文化、社会、政治、経済に一貫して適用され、自由を擁護する基本概念にまで高められていたことが分かるだろう。それは、戦後啓蒙やフランクフルト学派らの全体主義批判とは異なる切り口であり、社会哲学の分野における学術的意義も高い。

研究成果の概要（英文）：During the research period (2021-2023), I published a book titled "Political and Economic Thoughts of Market and Communality" as the principal investigator. It was a significant achievement to present the results of the JSPS KAKENHI project in the form of a single-author book. Additionally, it was important to provide a platform for young Polanyi researchers to showcase their work by organizing meetings to study Polanyi's philosophy, thereby expanding the research community. The meetings also supported young researchers in submitting peer-reviewed papers, fulfilling the crucial role of nurturing emerging scholars. However, due to the special circumstances of the COVID-19 pandemic, I regret being unable to conduct research at the University of Chicago, which houses unpublished materials from Polanyi. This will be a topic for future research.

研究分野：政治経済思想

キーワード：自生的秩序 暗黙知 パーク ハイエク マイケル・ポランニー

1．研究開始当初の背景

本研究の学術的な「問い」は、端的に言えば、「バークの保守的自由主義が、20世紀における全体主義批判論の淵源の一つとして、いかなる思想史的影響力をもっていたのか」という点にある。そのことを思想史的に討究せねばならないと考えていた。

第二次世界大戦後、ナチズムへの反省から「全体主義」というものが思想史研究においても極めて重要な討究課題となってきた。我が国の西洋政治・社会思想史研究のメインストリームとしては、アドルノ、ホルクハイマー、フロム、ノイマンらといったフランクフルト学派などのいわゆる左派による全体主義批判が屹立していた。それに関連して、日本思想界においても、丸山眞男や大塚久雄といった封建制の残滓を日本社会の問題と見る近代主義的な議論が主調となり、依然としてリベラルな立場からの全体主義批判が強かったと言ってよいだろう。

言うまでもないが、戦後啓蒙の知識人たちを、左派とか近代主義などと短絡的に一括することは絶対に忌避せねばならないが、少なくとも一般社会に封建的、共同体的、ムラのといった要素を全体主義へと連なる前近代的な抑圧の体系と認識させ、反対に、近代、進歩、個人といった要素を肯定的に捉えさせる分析視角を広めるのに、彼らが一役買っていたということは否定できない。丸山眞男や大塚久雄の思想が有する学術的な意味と、当時の社会的な意味とではズレがあるのは当然である。実際、一九六五年八月一六日の朝日新聞夕刊（東京）で久野収は、丸山眞男や大塚久雄、宇野弘蔵、川島武宜らの共通点を「近代主義者」であることとし、それというのも彼らは「社会科学的認識の主体を自立させた西欧の近代社会を、戦後の日本において実現し、さらにそれをさきまでのばそうとするからである」と指摘していた。軍国主義の総括が、当然ながら戦争経験者が社会的に多数であった時代にこそ、求められていたのであるから、そこに一つの説得的な解答を与えた戦後啓蒙の分析視角が日本の全体主義批判論に大きな影響を与えていたのも無理からぬことである。とどのつまりは、日本に澱のように残る前近代性こそが軍国主義の主因であるとされ、反面、保守主義は、近代化に反して封建的要素をノスタルジックに擁護するとして批判され、むしろ全体主義を否定するためには克服すべき障害たる思想とされたのであった。

例えば、保守主義の父として有名なエドモンド・バーク（Edmund Burke, 1729-1797）は、反近代主義者であり、封建主義者だと長らく捉えられてきた。バークの主著『フランス革命の省察』でもとりわけ有名な「騎士道の時代は永遠に過ぎ去り、詭弁家・経済家・計算屋の時代がそれに続くであろう」という名文句には、戦後日本の社会科学に大きな影響を与えたマックス・ウェーバーが、『近代』の構成原理の一つを計算可能性に見ていた点を鑑みれば、近代的な合理主義への批判、封建的なものと近代的なものとの対立、そして封建的なものへの哀惜が見られるとされたのも致し方なかった。

言うまでもなく、保守主義は権威主義化する可能性を孕んではいるが、むしろ良質な保守主義思想家たちは自由主義的側面を有していたことは強調しておいてよいだろう。保守主義の父と言われる先述のバークは、実際、フランス革命を批判したが、その理由の一つは、フランス革命体制が全体主義的な軍事独裁に必ず墮すると考えたからであった。それに比して、国王・貴族・民衆の混合政体たるイギリス国制はその多元性から自由を保持すると考え、その自由こそが経済にもプラスになると考えていた。当然、バークが政治的自由と経済的自由を擁護するに至ったのは、彼の出身地が、不在地主やプロテスタントによる宗教的・政治的圧制に苦しみ、経済的にもイギリス重商主義の犠牲となっていたアイルランドであったという背景もあるだろう。社会とは多元的階層制であるという視座が、イギリス人の社会秩序観の根底に脈々とあり（Cannadine, 1998）それは封建的な見方であるとは言え、むしろ一元的秩序化、つまりは全体主義化への観念的抵抗となっていたという見方も可能なのである。実際、バーク主義を「正統」（J・G・A・ポーコック）の思想と見なし、封建制を温存し続けたイギリスは、議会制民主主義にせよ、経済的自由主義にせよ、世界の最先端に位置する自由な国となっていった。そのように考えると、封建制の擁護が必ずしも全体主義的な議論につながるということもなければ、自由主義を否定することにもならず、むしろ全体主義批判へとつながりうるものであったということと言えるのではあるまいか。実際、バークの封建主義的要素がいかに自由主義に結びついていたのかということについての研究が、内外で近年盛んになってきているのである（Pocock, 1985. 小島, 2016. 立川, 2020）。

2．研究の目的

全体主義を批判した保守的自由主義の系譜を丹念に追うことによって、フランクフルト学派などの左派の全体主義批判とは異なる「保守的自由主義による全体主義批判の論理」を明らかにすることが基本的な目的である。先述の封建主義的自由主義的要素は、保守主義の成果であると言え、これが封建性と近代性がシームレスに繋がるイギリスの歴史的・思想的・政治的状況を読

み解くにあたって極めて重要な視点であったことは論を待たない。しかし、我が国では、封建主義や保守主義が短絡的に全体主義や軍国主義に結びつけられた結果、この点での研究が大きく遅れてしまった。実際、バークを全体主義批判として読み解こうとすれば、非封建的モダニストとして描く他ないという戦後啓蒙の影響下にあるバーク研究の状況は未だに根強く、国内的にはもちろんのこと、国際的にもモダニスト・バークが唱え続けられている。私見では、バークは封建的なものと近代的なものとを連続性の中で捉えており、彼の中では、それは二者択一的なものでも相反的なものでもなかった。そこが捉えきれないと、バークの騎士道への哀惜も理解できないし、バークの自由主義も理解できないし、ひいてはイギリス社会も理解できない。近代的自由を守るための前近代的要素という保守的視座は、バークによって主題的に提起され、それは20世紀においても、全体主義批判の系譜として一定程度影響力をもったと本研究代表者は考えている。

したがって、本研究においては、この保守主義が特に提起してきた近代的自由を守るための前近代的要素という視座が、全体主義の嵐が吹き荒れた20世紀において、全体主義批判の論理として、いかなる思想史的影響力をもっていたのかという点を、解明すべき重要なテーマとして設定している。

3．研究の方法

そうした保守主義的な視点から20世紀の全体主義を批判した思想家として、ごく一部ではあるが、ヨハン・ホイジンガ、F・A・ハイエク、　・ポランニーらを挙げることができる（ハイエクは保守主義者ではないと自らを規定しているが、バーク主義者であることは自任していた）。多くの保守的自由主義者による全体主義批判論があるのに、この三人を特に検討するのは、本研究代表者が、この三人については論文も発表し、研究をある程度進めていたからである。対象を絞ることで、三年という期間の限られた研究において、実効的な成果を確実に期待することができる。こうしたバークの提起した近代的自由を守るための前近代的要素という視座は、20世紀の保守的自由主義による全体主義批判論の基本視角となっており、この三人の巨人　特に最近研究を進めているハイエクと　・ポランニー　に対するバーク主義の影響関係を読み解くことは非常に思想史的に重要であると思われる。そのため、ハイエクやポランニーに関する研究を行っている研究者をつなぐ研究会の開催や海外での資料調査などを行い、知見を広めることが肝要であると同時に、研究ネットワークの構築も必須となるであろう。

4．研究成果

本研究期間における最大の研究成果としては、単著『市場と共同性の政治経済思想』およびマイケル・ポランニー著『ミーニング』の翻訳を刊行したことであろう。ポランニーの『ミーニング』は全体主義批判を一つのテーマとしており、その難解な議論の内容を日本語で社会に問うことができたのは大きな意義があると思われる。ポランニーの中で、要素還元主義批判という科学哲学的議論が、大きく生命、宗教、文化、社会、政治、経済に一貫して適用され、自由を擁護する基本概念にまで高められていたことが分かるであろう。それは、戦後啓蒙やフランクフルト学派らの全体主義批判とは異なる切り口であり、社会哲学の分野における学術的意義も高いと思われる。

【引用文献】

Cannadine, D., *The Rise and Fall of Class in Britain*, Columbia U.P., 1999. [平田雅博・吉田正広訳『イギリスの階級社会』日本経済評論社、二〇〇八年]

Pocock, J.G.A., *Virtue, Commerce, and History: Essays on Political Thought and History, Chiefly in the Eighteenth Century*, Cambridge U.P., 1985. [田中秀夫抄訳『徳・商業・歴史』みすず書房、一九九三年]

小島秀信『伝統主義と文明社会——エドモンド・バークの政治経済哲学』京都大学学術出版会、2016年

立川潔「エドモンド・バークの経済的自由主義——自由な市場と階層的な社会秩序」『成城大学経済研究』第230号、2020年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小島秀信	4. 巻 52-4
2. 論文標題 書評「重田園江『ホモ・エコノミクス--「利己的人間」の思想史』(筑摩書房, 2022年)」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『社会科学』	6. 最初と最後の頁 373-378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小島秀信	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 「マルクスにおける貨幣の社会的基礎」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『同志社商学』	6. 最初と最後の頁 25 - 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島秀信	4. 巻 73(5)
2. 論文標題 「普遍性・無歴史性・価値相対性 - アメリカニズムの思想的考察」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『同志社商学』	6. 最初と最後の頁 71 - 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小島秀信	
2. 発表標題 「マイケル・ポランニーにおける知識と自由」	
3. 学会等名 中部哲学会	
4. 発表年 2023年	

〔図書〕 計1件

1．著者名 小島 秀信	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 400
3．書名 『市場と共同性の政治経済思想』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究会の成果として、マイケル・ポランニー著『ミーニング - 人間の知的自由について』（飯原栄一・小島秀信・山本慎平訳、ミネルヴァ書房、2022年、ISBN9784623089307）を刊行。

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------